

秋の文化祭



各種団体が協力 絢爛と開く

今年の文化祭もすでに始まる事六回、去る十一月二、三、四日の三日間盛大に開かれた。すでに内容は会場、催物で案内の通り、展覧會、映画、各種演劇、即興會等多彩なものであつた。終戦六年目にして待望の講和條約は締結されたが、複雑微妙な世界情勢の中に日本は亦大きな變貌をとりようとしてゐると、此の文化祭も多大の反響と當町の文化水準を示すものと各方面より注視の裡に幕を上げた。文化祭の一端を歩きの肥!

繪畫展

こんな田舎町に小さいながらも相當な内容をもつた美術團體が存在して、毎年一回は展覧會が開かれて來てゐることは、この町の幸福の一つである。今年の文化祭にも公民館趣味部が、一連になつて若鷗會の繪畫展覽會を開くことが出来たことを喜ぶたい。今回の出品は洋画十二人、三十二点、日本画四人、八人の作品が出品陳列され、こじんまりと一室にまとまつたよい展覧會であつた。戦前から戦後、時々の濁流に押し流されないうで、黙々と研鑽をつづけていた洋画の岡根、富田氏、日本画の近藤、五十島氏が忠実な描寫で充実した老練の技も見られる作品とならんで、玉木、外川、大橋、和田、新田、巻口、坪川、富岡氏等二十才前後の若い同人十数人が新しい時代感と、燃える情熱の息吹きを感じられる作品が数多く出陣されたこと、この地方においてのこれからの美術文化発展の大きな底力でもあつたと思われた。

書道

今年の文化祭の出品作を見れば、人々は直ちに感じられたであろう。明るく健康に仕上がつてゐる。明らに、昨年より一段と実用的であり、裝飾的であり、美的感覺の横溢した日常生活面にマッチした作品が多かつた。ことに、氣づかれたことである。部屋の配置もゆつたりとして、氣持が良かった。更に來年度一層の健進と出品諸氏の不斷の研鑽とを祈る。

寫眞展

さすがに白根の風景と無心な子供達が寫されて、秋の野の尾花のそよぎが鮮明である。日本人の四季に対する感覺が寫眞の上にも敏感に現れてゐた。左は飯原氏の御感想である。各位の精進により、年々作品が立派になつてゆくのはうれし。A氏の風景、B氏の人物、C氏の山岳、どれも傑作であつた。各人が寫眞に取り組んで眞面目に研究し製作して居られる態度が、作品に現れていて感激致しました。文化祭に寫眞部が参加する事により、祭典の意義を深めると共に町民の精神に寫眞藝術を理解して、親しみ、興味として寫眞を寫す人の一人でも多くなると事を望んでゐます。

菊花展

この室へ這入つた途端、秋が鮮々と感ぜられる。夏の炎天つづき、秋の永雨等本年の片寄つた天候を克服して咲き出でた大菊二百餘鉢、小菊四十餘鉢が、観賞として香つてゐる。斯界の權威、審査長の橋本惣五郎先生の御講評

である。幹葉の品位の佳き、花型の整然たる出来栄は、縣下隨一の御譽めのお言葉があつただけに、金銀の短冊や、左記入賞五位以下の方々に、名作があつたが、最後に池田信治氏の菊作りの秘訣を公開しておきます。

菊作りの話

(池田信治氏の談話より) 菊作りは大へん難かしいように思つてゐる人が多いが、想像する程むづかしいものではない。菊作りの第一の要は培養土の善し悪しです。秋の落葉を山積みにして、土をうかす。雨が直接當らぬようにして、置けば、五六月頃迄には充分に腐ります。それを炎天に二、三日乾燥し粉にすれば、完全な培養土が出来上ります。培養法は作者に依り多少の相違はありますが、共通な点は六月の入梅期に芽挿し(やわらかい部分を二葉宛付け)切り荒砂に挿す。すると二週間根を下げますから根を痛めないやうにして、四寸位の鉢へ移植します。八月中旬頃芽が五、六寸位に伸びたら、七寸位の鉢へ移植します。九月下旬に施肥(主として油粕小盃盞に一つか二つ)すれば、主なる手入れは終つた譯です。後は花の咲くのを待つばかりですが、但し此の間病虫害の予防が大切です。から予防薬を散布しなければなりません。初めて作る人は肥料が過ぎて失敗しますから、肥料は控えめにします。風通し、陽當りのよい場所、給水は多くしないやうに。小鉢養成中は日光の直射は午前中位とし、午後は蔭で管理する。永い期間丹精を要するやうですが、それが又菊作りでなければ、味わい得ない妙味なのであります。

活花

此処、龍部の中心にあり、先ず入口正面に二間のセツトを新設して大盛花を挿し、參觀者が部

徹底しない結婚改善

結婚——それは理解と信頼と愛情に基いた生活でありたい。そしてこれは誰かが歩まねばならぬ人間の過程でもある。時は流れる。新しい時代の新しい生活。それを感ぜ、その息吹を吸うことによつて、新しい社會を創り、新しい生活を築くことが出来るのではないだろうか。そこで、これから「結婚式」と云ふ問題を取上げてみるのも決して無駄ではないか。

結婚式は云うまでもなく、嚴肅且意義あるものでなければならぬ。果して今日までの大部分が、それであつたらうか。見栄に取つた花が、形式に追われて本來の姿を著し、歪められてしまつたのではないだろうか。

一生に一度の結婚式なのだから、一杯に飾り、派手に豪華に挙げたいのは親心の常であるかも知れない。そして世間に対して、肩身の廣さを思ふとき、そのケチな心も立派である。しかし、この反面、この要求と相容れない経済的制約に大きな矛盾を感じるに相違ない。特に最近のように物價高の金づまりの渦中にあつては、一層この矛盾をひきつらね、痛感させられるだろう。

この地方の結婚式は、随分金が掛る。いわゆる「出祝言」と申して、親類縁者が集つて三日三晩は飲みや、歌えのドンチャン騒ぎである。それに衣裳だ。家具調度品の類だと言ふと、恐らく十数万圓の金が費されるのである。いかに、娘三人生れれば、家が潰れる」とよく言われる。しかも先別も書いたように、結婚式に費つて萬金を費すことによつて見栄を取らぬ。聞くところによれば、世界で結婚式に一番金を掛けるのが、中華、次が日本だ。そして、斯う云ふ驚愕な觀念は必然的に打倒されれば、元費を省き、他の途に求めた方が有意義だと考へる。例へば飲食の費用を思い切りつめて、二人だけで温泉で遊ぶのも無意味ではない。又、それで最少限の生活必需品を購うのもよい。出来るだけ、まさかの時に使つては先

茶の湯

これは利久の流れを汲む、千家の茶の湯が設けられて、古画の屏風のかげに茶釜の湯の沸いてゐる感じがよく、奥まつたあたりにお嬢さん方の赤い髪がちらちらと見える。

「案外金が掛りましたね。もつと盛大にしたかつたのですか。……ほんとに困りました。……」と頷を垂らした。私は、親の聲を耳にするとき、我々は舊い觀念を振り落し、更に全生活の觀念の再認識を要するのではないだろうか。家の格式もあらう。又世間もあらう。どこそこさんがある位に、したんだから、家もあれ位に、したんだから、……」

時代にこんな風に強制してゐるのかもしれない。斯うやつておむるに生活の合理化を計らなければ、どうしてこの激しい世の中を渡つて行く事が出来るやう。兎に角生活に対する新しい心構えを持つ事が要されるのであるまいか。

「結婚したいがどうも金が掛つて、……」と云う結婚適令期にある若者の吐息まじりの声を聞くにつけ、果してこんな状態でのよいだろうかと思ふ。それがつまり、金銭の問題で悩んでゐるのだと思ふとき、可笑しい云ひ方もないが、……」

「おねがい」 公民館報に対して率直なる御批判御意見を自由に御寄せ下さい。亦如何なる記事の掲載を希望せられるかおしらせ下さい。

おねがい

「原稿募集」 感想、隨筆、短文(郷土的な物) (1) 感想、隨筆は千字内外 (2) 短歌、俳句、川柳三首三句以内 (3) 原稿は原稿用紙、種別毎に別紙 (4) 締切 一月十日 (5) 宛先 白根町役場公民館係

「おねがい」 公民館報に対して率直なる御批判御意見を自由に御寄せ下さい。亦如何なる記事の掲載を希望せられるかおしらせ下さい。